



菜園は新しい出会いと 交流の場

群馬県太田市 さいゆうかい 菜友会





東武伊勢崎線で関東平野を北上し、大河の利根川を渡り渡良瀬川をかすめながら電車はやがて太田駅に到着する。両毛地域の中央にある群馬県太田市は、自動車産業をはじめとする製造業が集積し街路が広々としているように感じられる。

太田市飯塚町の運動公園西交差点近くの緑地帯に、朝8時半を回ると作業着姿でタオルを巻いた「菜友会」のメンバーが次々と集まりはじめた。

菜友会は40年以上に渡り活動を続ける家庭菜園の会で、現在は市内飯塚地区と龍舞地区の計7か所で菜園を管理しており、中庭三夫さんが代表を務める。

はじめに行う緑地帯の花壇の整備事業は太田市の「1%まちづくり事業」の補助を受けて実施しており、季節の花を植えて地域を彩る。この日は満開のパンジーの刈り込み作業が行われ、女性会員は「この花は私たちより若いね」など冗談を言いながら手を動かし、ボカシ肥料を蒔いて耕運機をかけ、次に植える日々草の準備を行った。

続けて、隣接する中庭さん宅でEM菌を使った「ボカシづくり」を行う。4つのグループに分かれ、もみ殻や米ぬかに糖蜜を混ぜたEM活性液を混ぜて、グループのみんなで丁寧に混ぜ合わせていく。ベテラン会員の目により、発酵を促すための水分量や混ぜ具合を見極めていく。触れてみると手にしつとりとした感触が伝わり気持ちいい。「白いカビは麹菌だから大丈夫。綺麗な色は危ないよ」など話を交わし、ベテランも初心者も自然と学び合う。混ぜ合わせたボカシは樽に詰めて密封し、1体700円で持ち帰り各自の畑で使用する。今回は22樽分のボカシ肥料ができた。

女性会員に話を伺うと「自分自身が病気をしたことで、新鮮で安全な野菜を求めたい気持ちが強くなった」「EMボカシを使うと野菜の味が違う。畑に行くといやなこと忘れれる」と



いう声が聞かれ、植物や土に関わることを楽しんでいる様子だ。作業が一段落すると、菜友会のメンバーは全員が車座になり情報交換と研修の時間。この日は、NPO法人足利水士里探偵団理事長の福地浩気さんから「連作障害と輪作」をテーマにミニ講演。大学院で農学を学んだ福地さんは、化学肥料や農薬の大量使用により土壌が疲弊し連作障害が起こってきたことを説明し、微生物を大事にした土づくりの重要性を語った。会員からは「肥料を入れたらネギが腐ってしまった」「サツマイモを育てても実がならない」といった質問があり、福地さんから実践的なアドバイスをしていく。

その後、飯塚地区にある「すみえ菜園」で、ボカシ肥料を畑に投入する作業も行われた。菜園は地主の名前から名付けたもの。発酵が進んだボカシ肥料を畑に入れて耕し、種を蒔くまでしばらく寝かせておく。微生物が落ち着くまで待つそうだ。ボカシ肥料はワインのような香りで発酵の力を実感する。また、小学校の近隣にある「あさひ農園」も訪れる。「あさひ小支援隊」に参加する菜友会の会員は、太田市立旭小学校の児童と保護者による農作業をサポートしており、食育や環境学習の場として地域と学校を結ぶ重要な拠点となっている。

菜友会代表の中庭さんと幹事長の俵山秀俊さんのお2人にこれまでの活動について話を伺った。

菜友会の活動のはじまりは、中庭さん宅の目の前に広がる耕作放棄地となった畑が高齢の地主に使われず除草剤が撒かれていた状況を見て「自分に草取りをさせてほしい。できれば野菜を作ってみたい」と申し出たことがきっかけだった。地主は「責任をもってくれるなら」と承諾。そこで、当時の三洋電機に勤務していた中庭さんと俵山さんが中心となり仲間を募り12人で活動を開始した。当初は家庭菜園という言葉も一般



的ではなく「農家を始めたのか」と社内で話題になったと振り返る。地元出身の中庭さんが農地の確保を担当し、社内で福利厚生を担当していた俵山さんが参加者の調整を担当した。市内の地主と菜園希望者の双方から注目を集め、会員は3年で約70名に増え、菜園も飯塚地区に加え龍舞地区にも設けられた。菜園は地主から原則無償で借り受けている。

EM菌との出会いは平成5年。中庭さん・俵山さんがEMの開発者、琉球大学の教授の講演を聴いたことにはじまる。微生物を活かした土づくりに可能性を感じた中庭さんは、当時足利市内に勤務していた関係から、市役所や足利商工会議所の協力を得て、足利EM普及探偵団(現在はNPO法人足利水士里探偵団)を設立し、EM普及の活動にも乗り出す。こうしたEMとの出会いは、それまで悩まされていた連作障害を解消し、微生物を育て、自然環境と食の安全を両立する菜園活動へと大きくステップアップしたという。

最後に、菜友会が考える畑とは？ 家庭菜園とは？ どんなことが尋ねてみたところ「野菜を作る場」「新しい出合いの場」「地域や友人との交流の場」「自分の家以外の居場所」と4つのコンセプトを挙げる。

畑をやっていると、雑草、蒔いた種の成長、天気心配など頭を使うことが多い。畑に行つて誰かと話すとお互いの健康状態の確認や病院の情報も共有できる。こうした仲間がいることが大切だ。「今日やることがあること。今日行く場所があること」が健康の秘訣だと話す中庭さんと俵山さんの笑顔。そして、今日のボカシづくりで交流をする会員の皆さんの充実した顔が印象に残った。活動をはじめた40年。菜友会の畑には、つながりが根づいている。

【連絡先】 菜友会 (代表・中庭三夫さん)
メール: asatsuyu-21@r.sky.sannet.ne.jp

